breitung in Eurasien

A. Zakharov; The Statue of Zbrucz

C. G. Seligman; Bow and Arrow Symbolism

J. G. Andersson; Some folk-lore Notes in Hulsunds Jabonah.

B. Nerman; Swedish Viking Colonies on the Baltic

F. Kivikoski; Eisenzeitliche Tontatzen aus Åland

F. D. Kendrick; Some Types of Ornamentation on Late Saxon and Viking Period Weapons in England

F. Balodis; Ein Denkmal der Wikingerzeit aus Semgallen

N. Cleve; Finnländische runde Fibeln der Wikingerzeit aus Osteuropa

（山本）

● Tombs of Old Loyang.

A Record of the Construction and Contents of a Group of Royal Tombs at Chin-tsun, Honan, probably dating 550 B. C.

Shanghai 1934

W. C. White

昭和四五年の頃から河南省洛陽東郊金村出土と稱せられる古器物が夥しく世に現れ、その多量であること、華麗なこと、そしていはゆる秦式で珍奇な形式に富むことから、夙に注意されてゐたが、殊に屬氏鐘・嗣子壺など紀年の銘文を有する點で支那の學者間にも華々しい論議をまき起した。蓋し近年における大盜掘であつて、その重要さは往年の河南新鄭古器物にも優るものであるが、遺物はその時よりも不幸な狀態で、全然散佚し盡し、いまでは世界各地に分藏せられてゐる。ところが、開封在住のホワイト氏が親しくその地を調査し、發掘者の言を蒐めまた散佚して行く遺物を記錄にとゞめて、遂にこの一書をものせられたことは實に不幸中の幸であつて、この書を得て喜ぶのはひとりわれわれ考古學者のみではあるまい。

洛陽の東三十五支里、邙山の下に全く同形式の古墓八基と、なほいくらか形式のちがふ小さい墓三基が發掘されてゐる。地上には何らの封土なく、元來は坦々たる平地で、いまはたゞ上げた土が盛上つてゐるのみである。墓室は深く、地下四十七呎はあり、各々幅十呎長さ二百五十呎位の長い隧道が南面に走り、またその左右に平行して、土人が馬坑と稱する車馬を副葬した墓坑（十呎に五十呎、深十乃至十二呎）がある。これらは全部掘り浚へられた譯ではないが、發掘者のボーリングによつてよく調べられてゐる。隧道は北に向つて下降し、深さ四十七呎の墓室に連る。墓室は徑二十呎弱の八角形で、ほゞ一呎角の角材を並べて作る。床は南北に走る角材一層、壁は角材を五つ重れ、天井はまゞ南北に走る角材一層に次いで東西に走る角材を一層重れてつくる、その上には木炭層と礫層とを以つて交互に三回づゝ掩ふ。床材の下には長四呎、幅二呎、厚四吋の石板を並べる、入口は南側にあるが、いま扉の類を存しない。壁・天井には暗褐色の漆を塗るが、壁の上部には幅一呎のフリーズを作り、塗金金具を嵌め、また白・朱の彩具で、龍か鳳凰の如きも

のを描いたらしい。中央に木棺がある。棺は二重れで、内には朱、外には暗褐色の漆を塗り、外側には獸鐶金具がある。副葬品は棺前・門口及び壁の凹みに安置せられ、車馬飾は馬の骨とともに馬坑から發掘された。

遺物にはまづ驪氏蟠螭文編鐘を初めとして五十以上の完形の鐘と破片を出土し、蟠螭文壺・金錯獸鐶・獸鐶壺・有脚壺・彷・扁壺・盉・簠・盂・雷文豆・提梁盤・雷文鍑・鬲・鼎・勺・匕・行鐙・獨脚鐙・轆轤鐙などの銅器、變化の多い鏡や帶鉤、短劍・支那式銅劍・拋墨・鎌などの利器、馬面・轡・轄その他の車馬飾、漆壺・漆鈁及び陶壺、圭・璧・環・玉杯・璜・琥・玉豚・玉帶鈎などの玉器、及び青銅人物像・馬・猿その他の青銅像・漆塗木彫等身大の虎がある。ともに、夥しい玻璃製品・子安貝を出土してゐる。そのうち殊に重要なのは驪氏鐘であつて、その銘の二十二年が周の靈王二十二年(西紀前五五〇)、安王二十二年(前三八〇)或は威烈王二十二年(前四〇四)だとの說がある。これによつてこれらの遺跡・遺物に年代を與へることが可能となつてくる。蔥衡・雙璜を有する一聯の佩玉(第三一〇圖)も未だ嘗つて見なかつたものであるが、これに伴つて出土した諸玉は彫鏤が鮮鋭であつて、殊の外美事であるし、玻璃細工の樣々も人目を惹くに足ると思ふ。細緻なる秦鏡・秦銅器の文樣は暫く措くも等身大の虎の像(第二一四圖)や樣々の人物像(第二〇一―二〇八圖)は當代彫刻の發達を目のあたりに示すものである。貼金ボタン(第四〇八圖)に彫られた山と樹木、虎と鳥と雲との線畫は小品であるが、

自由放膽でしかも簡結である。誠に秀逸の作と云ふべく、その背景の山や木はまた珍らしい貴重な資料である。なほこの古墓群から出土した變化に富む帶鉤類も注意に價すると思ふ。

いはゆる韓若墓の遺蹟並びに遺物は新鄭遺物に劣らぬ重要な發見で、これをこゝまで復原したことは何と云つてもホワイト氏の功績である。記載の不充分は本書の闕陷ではなく、むしろその調査のいかに困難かを物語るものと云ふべく、それを敢へて克服しようとした著者の努力を多としなければならない。目下の狀態ではいかなる報告書の不備も忍ばなければならない敢へて不滿足の意を表明すべきではないのである。しかし、私に思ふに本書に載錄した遺物は要するに開封なり、洛陽なりの古物商の手を經たものであつて、自ら他の遺物の混淆するを免れない。著者も充分このことを自覺してゐるらしいが、なほ若干の明瞭なる混入がわれわれの目に著く。例へば第一四六圖の骨製櫛などである。かう云ふことはほんの瑕瑾で敢へて問ふに足りないことだが、とにかくかくの如く混淆を免れない狀態にあるのだから、もう少し著者が調査した場所とか、日付とかを記入して讀者にも批判の餘地を與へられたらと思ふ。遺蹟に就いても墓室の平面圖と斷面圖まで挿入され、甚だ貴重な資料を提供するのだが、その調査した事情が殆ど書かれてゐないので讀者に批判の餘地を與へないのみならず却つて讀者をしてその資料のどこまで確實であるかを疑はしめる因を開いてゐる。

●刪訂泉屋清賞　昭和九年刊

住友家における支那古銅器の儲藏は世界的な存在でありその圖錄正・續・別集の八册はまた實に世界的な聲價を有する。しかし、その浩瀚のため既に縮刷が刊行され、いままたその簡明目錄が印行された。本書は簡明目錄であるが、最近に於ける古銅器研究の結果が遺憾なく利用され解說は殆ど面目を一新し、別に收められた濱田青陵博士の古銅器概說、梅原末治氏の古鏡概說も原刊圖錄本とは著しく趣を異にし、原刊圖錄本とは全然別個の存在價値を備へたものである。殊に最近十年間に於ける古銅器研究の發達は著しく、それが悉く原刊圖錄本とこの刪訂本に反映してゐるのであるから、その相違は特に顯著である。その最も大なるものをこゝに指摘するならば、古銅器の年代觀である。圖錄本の解題における年代は、いまにして云へば、實に根據の薄弱なものである。一器一器に就いてその樣式とは別に恣な(尤もこれはいまだから云へる言葉であるが)年代付けが語られてゐた。それが本書では全く樣式的見地から周・秦・漢の樣式によつて解說された。その實年代はまだ將來の研究に俟つべきであらうが、その樣式的內容はかなり確實なものにまで到達してゐることを示す。この點は古銅器概說のうちに殊に顯著に認められる。周・秦・漢の樣式的變遷を銘字・器形・文樣の三方面から明らかにされ、その間の變遷は決して單に墮落とか衰微とかの言葉で云ひ表はさるべきものでなく、時代の趣味と精神との變遷に基くものであることを道破せられた。年代付けに關する限り古鏡の部は古銅器の部程に進展を示してゐないが、秦式鏡の知見に於いて著しい進步のあとが看取される。原刊圖錄本と本書とは最近二十年間における支那古銅器研究の進步を示すバロメーターである。一々比較して行くことは興味あることだが、それは當面の目的ではない。いまは本書が支那古銅器研究の最近の水準を示すものだと云ふことを以て、紹介の辭としたい。卷頭に內藤湖南博士の序、卷末に住友男爵の跋があり、全篇四六倍二百二十頁、圖版六十五葉、別に參考插圖若干を收めてゐる。

●新羅古瓦の研究

京都帝國大學文學部考古學教室　第十三册

濱田耕作・梅原末治著

この報告書の一卷は、昨年二月長逝された牛津大學アーチボルド・ハンリー・セイス博士の靈に捧げられてゐる。故セイス博士と著者達、乃至その教室との深い關係はこの書の序言中に詳しく述べられてゐるが、平生その間の事情を聞知してゐるものにとつては、本書がいかに深甚なる追慕と哀惜のうちに編せられたか、また學術的にもいかに細密な注意と愼重さが特に加へられたかといふことは想像に難くないところであらう。

第一章に於いては新羅古瓦の蒐集や研究の發達を述べ、第二

章では東亜に於ける瓦甎使用の發達流傳を說き、新羅瓦が高句麗百濟を經由して佛寺建築とともに支那から傳つたことを述べ第三章ではこれらの古瓦が出土する百個所に近い宮殿址・寺址を擧げ、今日吾々が見てゐる大部分の新羅瓦は新羅統一時代の上半期、卽ち西曆七世紀の後半から八・九世紀の所產なるを論じ第四章では瓦塼の用途から圓瓦（いはゆる巴瓦）、平瓦（いはゆる唐草瓦）それから下り棟の隋圓瓦、軒廻りの隅にある隅瓦、棰木の端の棰木瓦、また土壁の端などに用ひられた小瓦、鴟尾、鬼板などの種類があり、甎には敷甎と壁甎があることを說く。第五章第六章に入つて、圓瓦・平瓦の文樣を系統づけ、圓瓦は蓮華文系と禽獸文系に、平瓦は唐草文系と飛天禽獸文系にそれぞれ二大別し、第七章では敷甎と壁甎との二種類を說く。これによつて新羅瓦文樣の全貌はほゞ明らかになつたわけで、當代の日本・渤海乃至唐（?）の瓦塼との相違點も一應了解される。次さに第八章は慶州古瓦の圖紋と出土遺跡との關係と題し、(1)圖紋を異にした多樣の瓦が一寺址から發見されること、(2)同一圖文の圓瓦、平瓦が隨處の違つた寺址から發見されること、(3)下顎文に於いて全く同一の型文が違つた主文をもつ瓦に現れることの三點を特に注意された。これによつて次章に於ける製瓦工場の限られてゐたこと、從つて造寺とは別に瓦の製造が行はれたと推定する伏線とする。第九章は結論で、新羅瓦の特質を論じてゐる。卽ち、新羅瓦甎は文樣を要素的に見ると、印度・波斯その他に系統をひくものがあるがしかしそれらは皆支那唐朝の藝術界經由のもので、しかも新羅瓦文樣の凡ての要素はこの唐代の工藝に遡源することを得るのである。しかし、これを瓦甎に應用し、極度に驅使したところは、實に新羅獨特の發達であつて、新羅の鍍金細工、高麗の青磁にも類似する。それは瓦甎輸入とは別に優れた彫塑の技術者達があり、その傳統が遂に外來の瓦甎をかくまで變化し、多樣に浮彫的に發達せしめたと解せられる。しかも、それは建築の一部分としての瓦といふよりは、一個の浮彫タブレットとして細い表現を行つたもので、architectonic といはれるよりはむしろ pictorial である。

本文七十二頁、挿圖四十四、新羅瓦集成圖版七六枚。その圖版配置の苦心、そしてその整齊は本文と相並んで高く評價さるべきで、圖版を繰ることだけによつても新羅瓦の大綱と、東亜の瓦甎中に占める新羅瓦の位置がほゞ理解できるであらう。本書における圖版の精美は古瓦の研究家のみならず、たゞこれを愛好する人士及びこれを利用せんとする圖案家の滿足をも獲るであらうと思ふ。（刀江書院發賣（水野）

●中華民國新地圖　申報館發行　定價銀武拾五圓

●中國分省新圖　同　同　銀參　圓

支那新聞界の雄申報の六十周年記念事業として編纂された中華民國新地圖はその體裁に於て將又その內容に於て既往に出版された支那關係の如何なる地圖帳にも優つて居り、中國分省新圖はその縮約版で共に東洋史支那地理研究者の坐右に備へて參